

十人十色 適材適所 性別不問

[連載エッセイ]

— 第4回 —

無意識の偏見に 気づく

大沢 真知子 ● おおさわ まちこ

日本女子大学現代女性キャリア研究所所長。同大学人間社会学部教授。南イリノイ大学経済学部博士課程修了 (Ph.D (経済学))。シカゴ大学ヒューレット・フェロー、ミシガン大学助教授、亜細亜大学助教授を経て、現職。著書に「女性はなぜ活躍できないのか」(東洋経済新報社)、「妻が再就職するとき」(NTT 出版)、「日本型ワーキングプアの本質」、「ワークライフシナジー」、「ワークライフバランス社会へ」(以上岩波書店)、「21世紀の女性と仕事」(放送大学教育振興会) など多数。

現 代の労働環境、働き方と働かせ方、ワークライフバランス、離職や転職の仕方など、さまざまな角度から諸外国と比較しながら、わが国の課題を指摘していただいた大沢先生の連載エッセイも今回で終了です。最終回は、理想的な仕事の質と労働時間、そして女性の労働と給与のあり方について問いかけます。

大手広告代理店の新入社員が、長時間労働を苦にしてクリスマスの朝に自らの命を絶った事件以来、長時間労働の規制を求める声が強くなっている。長時間労働は日本人の勤勉さを反映したものと捉えられがちだが、日本経済の低生産性を反映した結果という見方もある。

そう唱える一人で、現在は日本の伝統文化財の補修を手がける会社の社長を務めるデービッド・アトキンソンさんの著書『新・所得倍増論』(東洋経済新報社、2016)を読んだ。日本は、私たちが考えているほど生産性が高くないにもかかわらず、高いと思い違いをしているために、生産性を高める努力を怠ってきた結果、潜在能力を活かせないという「日本病」にかかってしまっているのだという。

GDPと生産性の関係

思い違いの原因の一つは、日本のGDP(国内総生産)が世界で3番目の規模を誇るところにあるらしい。GDPは一定期間内に生み出された付加価値の

総額で、人口と生産性の積として求められるので、生産性が低くても人口が多いとGDPの値は大きくなる。日本の人口はイギリスの2倍、ドイツの1.6倍なので、GDPもその分大きな値を取るようになる。

しかし、人口要因を取り除いて生産性だけを見ると、日本は世界で第27位と大きく後退する。これだけ一生懸命働いても生産性が低いという事実は、日本人の持っている潜在能力が十分に活かされていないことを意味する。悔しくないですか? とアトキンソンさんは問いかけている。

なぜ私たちは生産性を上げる努力をしないのだろうか。アトキンソンさんは、その理由は、そ

の必要性を日本人が感じていないからだという。いままでが非常に順調だったので、制度を変える必要性がなかなか分らない。そこで現状維持を最優先に挙げてしまいがちなのだという。しかし、それでは(生産年齢)人口減少を乗り切れない。とくに問題なのは経営者。利益を上げたり新規事業に挑戦したりする経営者が少ない。投資が行われなければ経済も成長せず給与も上がらない。経済が成長しないので税収も増えず、国の借金が増え続けるという悪循環を断つことができないのだ。

先述の大手広告代理店で問題になったような過剰な長時間労働が常態化するの、会社として人材育成を含めた投資を十分に行わず、生産性を引き上げる努力を怠ってきた結果だと私の目には映る。

大切なのは、適正な労働時間を確保することはもちろん、人材の活用法を見直し、働く人の多様なライフスタイルを踏まえた柔軟な雇用形態を取り入れることによって、働き方の効率を高め、生産性の引き上げに繋げていくことだ。

日本の女性の潜在能力は活かされていない

私がアトキンソン著『新・所得倍増論』にとりわけ興味を持ったのは、その中で、日本の女性労働者について言及しているからである。

「事実として、生産性ランキング上位を占める国は、ほぼ例外なく女性の給料が高いという特徴があり、中略、それはただ単に高いのではなく、それなりの仕事を与えて、それなりに生産性を高めて、その分が給料アップに結びついているということです。」(アトキンソン、前掲書、p296)

それに対して日本では、女性は補助的な仕事に配属される傾向があつて、結果として欧米諸国と比べて男女間賃金格差が大きく、働く女性が増えてもそれが社会全体でみた生産性の向上に結びついていかない。

1979年の日本の女性の平均給与は男性の51.1%。これに対して2014年は52.9%。女性の社会進出は進んだのに男女の賃金格差はほとんど改善されていない。他方、アメリカでは男女間賃金格差は62.3%から82.5%と改善されており、(人口の影響を除いた)一人当たりGDPの伸びのうちの3分の2は働く女性の増加によつてもたらされている。つまり働く女性の数が増加しているだけでなく、女性の職場参加が生産性の向上に寄与しているのである。背後には、女性の高学歴化による能力の向上とその能力に見合った活用がされるようになったという変化がある。他方、日本では女性

の高学歴化は進んでいるものの、女性はその能力に見合った活用がされていないケースが多い。

現状維持のために非正規労働者が採用されている

日本で女性の社会進出が生産性の上昇に結びついていないもう一つの理由は、その多くが非正規労働者の増加によつてもたらされていることによる。2005年から2015年の10年間で労働者が276万人増加しているが、そのうちの8割(219万人)は女性非正規労働者の増加による。

そもそもなぜ非正規労働者が増えているのか。それは、90年代以降の日本の経済の変化が大きい。企業が国際的な競争にさらされる中で、人件費を削減しなければならぬプレッシャーが高まったからである。

ご存知のように、非正規労働者の賃金は正規労働者に比べて低い。スキルアップのような研修を受ける機会も少ない。せっかく能力があつてもそれを伸ばしていく機会が限られている。

アメリカを見てみると、60年代の雇用平等法の制定以来、女性が潜在能力を活かせるようにチャレンジングな仕事を割り振ることで女性にプレッシャーをかけた。他方、日本ではまだまだ女性に対しての期待度が低い。しかし、機会を

